



知床峠から望む羅臼岳

特集—6 世界遺産の知床国立公園 ～自然と人との共存を求めて～

【概要】

1964年6月1日に指定された。面積は3万8636^{ヘクタール}。自然景観と野生動物、自然体験を目的に、斜里町と羅臼町を合わせた来園者数(2016年度)は174万人に上る。代表的スポットである知床五湖に32万人、ウトロ観光船に12万人、カムイワッカ湯の滝に4万人、フレベの滝に4万人、羅臼観光船に2万人、知床連山に6千人、羅臼湖に2千人などが訪れている。情報提供施設として、知床自然センター、世界遺産センター、羅臼ビジターセンター、知床五湖フィールドハウス、ルサフィールドハウスがあるほか、環境教育や普及啓発、野生生物の保護管理・調査研究などを行う公益財団法人知床財団がある。半島中央に標高千メートルを超える山脈が連なる地形、半島の東西で異なる気象、流水が接岸する海洋など、他の国立公園にない環境特性を有する。特異な環境特性のもと、海岸から山稜まで手つかずの自然植生が連なり、ヒグマをはじめ多様な野生動物が生息する。

文・写真
小林 昭裕

こばやし・あきひろ

北海道大学農学部卒業、同大学院環境科学研究科修士、専修大学北海道短期大学造園林学科教授を経て現在、専修大学経済学部教授(農学博士)。知床に関しては2001年「知床国立公園適正利用基本構想検討会」委員を皮切りに、継続的に適正利用の検討に関与。現在、「知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議」委員。

指定前後の歩み

知床半島では、約8千年前から生活の痕跡がみられ、縄文文化やオホーツク文化のもとで狩猟・漁労・採集が行われてきた。18世紀末に場所請負制による漁場経営が始まり、明治以降に昆布漁や硫黄採掘、大正時代に開拓者入植など、資源開発や農業開拓が行われてきた。1960年前後、斜里ウトロ間の道路開通(58年)、知床林道着工(62年)、知床横断道路着工(63年)、知床岬に観光ホテル建設の動きなど、急速な開発が始まった。原始的な自然環境が損なわれる恐れが生じたこ

とから、知床半島の学術調査(53年)によって原始性の高い自然の価値を認識していた国立公園審議会は、地元からの陳情や要請を経ずに、原始的自然環境の保護を目的に、知床国立公園の指定に動き出した。

64年の知床国立公園指定後、自然保護に関して、斜里町自然保護条例制定(72年)、斜里・羅臼両町による「知床憲章」制定(74年)、遠音別岳原生自然環境保全地域指定(80年)、国設知床鳥獣保護区指定(82年)が相次いで行われた。一方で、「知床旅情」のヒット、知床プームによる観光客増加(71年)、知床横断道路開通

(80年)により、保護と利用との軋轢(あつれき)が潜在的に高まっていた。その矢先、知床国有林伐採問題(87年)が起こり、伐採反対の世論の高まりを受け、木材生産を目的とした「森林生態系保護地域」が知床に指定(90年)され、自然保護を優先する社会的価値が制度化された。

これ以降、「知床世界自然遺産候補地管理計画」の策定(2004年)など、保全管理の実効性が担保され、開発は影を潜めた。一方で、自然と人との共存に関する議論が主題となり、ヒグマとの遭遇問題に対応するため「ヒグマ対策管理検討調査」(97年)、過剰利用や不適切利用・誤利用がもたらす問題に対処するため「五



知床五湖 高架木道



フレベの滝附近の海蝕崖 オホーツク海

自然と人の共存は

事例から、自然と人との共存に関する動向をみると、まず、知床五湖では11年前、五湖を周回する地上歩道でヒグマとの遭遇が急増し、人身事故を回避するため歩道が閉鎖され、探勝できない事態が頻繁

湖・カムイワッカ間の車両規制開始(99年)、「知床国立公園適正利用基本構想検討会」の設置(01年)、「知床五湖利用調整地区利用適正化計画」の策定(11年)などが行われた。世界遺産委員会の勧告(12年)では、エコツーリズム戦略として、自然価値の保護、良質な体験の提供、地域経済の発展の促進が求められた。13年に「知床エコツーリズム戦略」が策定され、戦

略を具体化する検討が始まるとともに、10年以上に及ぶ議論を反映して「知床国立公園管理計画」が改訂(13年)された。



カムイワッカ湯の滝

発し、ヒグマと人との間に軋轢を生みかねない。かつて、ヒグマに利用者が不用意に人の食べ物を与えたことが原因で、人の食べ物に魅せられ習性が変わり、人間社会へ入り込んだ末に命を奪わざるを得なくなった事態があった。野生動物の習性を変えるような行為に無頓着な利用が増えれば、ヒグマと人との共存は困難になる。人の影響を受けていない本来の野生動物の価値を損なわないために、利用者などのような「間合い・振る舞い」をすれば良いのか。

知床全体にわたる点として、欧米からの利用者の増加が顕著な冬季の野鳥観察、国後水道でのホエールウォッチングなどの野生動物との接触到着目したい。そこでは、餌付けの問題を含め、野生動物に対する「間合い・振る舞い」が課題となっている。中でもヒグマに関しては喫緊の課題が生じている。例えば、岩尾別川ではヒグマを写真撮影する利用者の不適切な行動が頻発し、ヒグマと人との間に軋轢を生みかねない。かつて、ヒグマに利用者が不用意に人の食べ物を与えたことが原因で、人の食べ物に魅せられ習性が変わり、人間社会へ入り込んだ末に命を奪わざるを得なくなった事態があった。野生動物の習性を変えるような行為に無頓着な利用が増えれば、ヒグマと人との共存は困難になる。人の影響を受けていない本来の野生動物の価値を損なわないために、利用者などのような「間合い・振る舞い」をすれば良いのか。

知床の不易流行を考える

自然と人との共存の仕組みづくりは、不断の営みの積み重ねであり、「不易流行」を考えざるを得ない。「不易」とは変わらないこと、世の中が変わっても変わることがない、変えてならないもの、「流行」とは世の中の変化に従って変わる、変えていかなければならないものを表す。森羅万象は刻々変化し「流行」する。知床の先人達は「不易」即ち「不変とすべきもの」に対し、働きかけることで守ってきた。「不易」を基礎とし、「流行」の方向性と変化を検証する過程で、新たな知恵・技術・倫理観を獲得する中から「不易」を確かなものにするのが、知床ならではの自然と人との共存の途の行方を示すのではないのか。

宇登呂港から見る知床連山と遊覧船

ら続く昆布漁師にとって生計の場という歴史的・文化的視点への配慮が、これまでの議論で不足していることは事実である。原生的自然環境の保護と原生的な自然体験を損なうことなく、先端部で人が自然と織りなした歴史や漁労文化を、どのように取り込んでいけるのか。齟齬を生じない解決策の考案にあたり、商業ツアーではない手法を含め、知恵、技術だけでなく、判断のよりどころとなる倫理観など包括的な議論が求められる。

野生動物との間合い

知床全体にわたる点として、欧米からの利用者の増加が顕著な冬季の野鳥観察、国後水道でのホエールウォッチングなどの野生動物との接触到着目したい。そこでは、餌付けの問題を含め、野生動物に対する「間合い・振る舞い」が課題となっている。中でもヒグマに関しては喫緊の課題が生じている。例えば、岩尾別川ではヒグマを写真撮影する利用者の不適切な行動が頻発し、ヒグマと人との間に軋轢を生みかねない。かつて、ヒグマに利用者が不用意に人の食べ物を与えたことが原因で、人の食べ物に魅せられ習性が変わり、人間社会へ入り込んだ末に命を奪わざるを得なくなった事態があった。野生動物の習性を変えるような行為に無頓着な利用が増えれば、ヒグマと人との共存は困難になる。人の影響を受けていない本来の野生動物の価値を損なわないために、利用者などのような「間合い・振る舞い」をすれば良いのか。



国後水道でのクジラとの遭遇

に生じていた。また、特定の時期や時間帯に利用者が集中し、静寂な利用環境が損なわれていた。さらに、展望地などで植生の踏み荒らしが発生し、ヒグマを誘引しかねない、食べ歩きが行われるなど課題を抱えていた。「知床五湖利用調整地区利用適正化計画」(11年)では、利用による自然植生やヒグマなどの野生動物への影響を最小限とし、利用者の満足度を向上させるため、利用者ニーズに応じた自然体験の機会を選択できることが目標とされた。改善策として、知床五湖フィードハウスを拠点として五湖を巡回する地上歩道利用に対し、利用者数の上限を設定し、事前のレクチャーの受講やヒグマの活動期に専門の引率者によるガイド同伴を義務付け、より質の高い自然とのふれあいや原生的な自然を体験できる空間とした。同時に、ヒグマと利用者を立体的に隔離する高架木道の設置により、安全に利用が行える空間を創出し、利用者ニーズへの対応の幅を広げた。整備以後、ヒグマ出没に伴って地上遊歩道が閉鎖される日は大幅に減少し、自然環境への負荷や利用集中に伴う雑踏、不適切なマナーも解消傾向となった。その結果、ヒグマが

多く出没する時期における地上歩道の利用者数が11年時の6500人から16年に1万4800人へ増加し、利用者の満足度も高く、五湖の価値を高めることになった。一方、先端部は、一部の番屋を例外として、利用の痕跡に出会わない場所であり、自然環境保護や、静寂かつ原始的体験を損なわないように他の利用者への配慮、自己責任による利用、これらを担保するために動力船による上陸禁止が基本原則とされた。これは開拓や道路開発と保護制度との軋轢の中で、さまざまな関係者が原環境保護や原生的な自然体験の保全を選択した見識の現れである。最近、先端部で営まれていた漁業と自然との共生の歴史を体現することを狙ったエコツアーが地元から提案された。船外機船を活用し、漁業の伝承と環境保全に細心の注意を払うためにガイド付きを前提とし、上陸場所、ツアー参加人数、回数、行動範囲などを制限し、実施期間をコンブ漁期とする内容である。しかしながら、動力船による上陸は、徒歩利用を前提とした、先端部の位置づけと齟齬(そこ)を生じている。先住民族であるアイヌの生活の場、明治か